黒き王と血と涙

渚ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒き王と血と涙

【Ｎコード】
Ｎ８６０９Ｈ

【作者名】
渚ハル

【あらすじ】
日本は崩壊していた。突如現れた異能。それに伴い巻き起こる迫害と選民思想。そこにモラルはなく、ルールはなく、ただ快楽と欲望だけをを追い求める者達。黒金刹那はそんな日本にすべてを奪われた被害者の一人である。刹那は復讐のために業火に焼かれる覚悟を決める！主人公最強ものなので、そういうのが苦手な方はご遠慮くださいませ。逆に、鬼畜主人公によって敵がバッタバッタとあられていく爽快感を得たい方はどうぞ！

プロローグ

「許してくれぇー！！」

鼻水を流しながら、頭を地面に擦りつけるようにして絶叫する中年の男。
みすぼらしい服を身に纏ったその姿はこれ以上なく憐れである。
男の名前は望月。
何の罪もない男であった。
もしも仮に男へ罪を与えるのならば―
―存在することこそが罪なのだろう。

しかし、そんな望月にも守りたい者、譲れに者があった。

「ひっく、お父さん…」
「大丈夫、大丈夫よ！」

望月が庇っているのは、己の命よりも大切な家族。
娘と妻である。
理不尽だ！理不尽だ！理不尽だ！
望月は世界を恨まずにはいられない。

望月は敬遠な神の信徒であった。
毎日の礼拝を欠かしたことはないし、教えを破ったこともない。
ただ、平凡な毎日を望んでいただけだ。
だというのに！
こんな事があっていいのだろうか、と。
望月は娘と妻を抱きしめながら、声なき慟哭を上げる。

「殺せ」

望月を見下ろしていた黒の軍服に身を包んだ男は、何の感慨もなくそう短く告げた。
腕の辺りに備えられたこの国の神を意味する不死鳥のマークの銀の腕章がキラリと光る。

ダダダダダダダダッ！！

連続する銃撃音。
サブマシンガンの一斉射で、数多の尊い命がゴミのように消えていく。
否―この世において、尊い命とは限定されていた。
祝福された者とそうでないもの。
世界は絶対的な差別と共に成り立っているのだ。
多くの虐げられし者達を見ない振りをして……。

軍服に身を包んだ男―柳玲二は抱き合いながらも血にまみれるその死体を眺め、鋭利に整った顔を笑みの形に歪める。
見る者をゾッとさせる笑みを浮かべながら、玲二は部下に告げた。

「これを処分しておけ」

玲二にとって、眼前にあるのは、ただの『モノ』でしかない。
所詮は祝福を受けることができなかった出来損ない。
玲二は、その出来損ないで遊ぶのが唯一の趣味であった。
何の罪悪感も抱かない。
狂った選民思想に身も心も囚われた愚かであり、それゆえに恐ろし

い人間だ。
玲二は最後にもう一度だけ死体を一瞥すると、背中を向けて歩き出す。

「先に戻っている」
「はっ！」

玲二はそれから一度も振り返ることはなかった。

「はぁ……」

俺は一度だけ小さく溜息を吐く。
そして、目の前に広がる惨状を改めて目に焼き付けた。
俺が殺したのである。
何故なら、今の俺は柳玲二に付き従う従順な部下。
命令されれば、どんな汚い仕事も厭わない。
ゆえに、俺に後悔はない。
そんな資格はないし、そんなものに意味はない。
得られるのは自己満足だけだ。
それは許されない。
俺はサブマシンガンから火炎放射器に持ち替える。

今から、死体を焼却処分するのだ。
この世界において、祝福されていない者は最低限の尊厳さえ与えられない。
本当に腐りきった世の中だと思う。

だから…俺は―

火炎放射器のスイッチを押すと、青の炎が吹き出す。
その炎で一切の躊躇なく、死体を焼き払った。
人間の身体というのは、よく燃える。
俺が玲二の部下になって学んだといえば、それくらいだ。
燃え、いずれは灰になろうとしている、以前は敬遠な神の信徒だった家族に最後の言葉を告げる。

「神は俺が殺す」

炎は揺らめいて、俺の姿を映す。
いずれはこの身もその業火に焼かれることになろだろう。
その日まで、戦い続けよう…。

今からほんの五年前。
神から祝福が与えられた。
それは冗談でもありきたりな妄想でもない。
何故なら、現実に異変が起こったのだから…。

―ある者は手から炎を生みだした。
―ある者は重力を操ったと言う。
―ある者は空を自由に飛び。
―ある者は龍に姿を変えた。

まるで空想の世界。
非現実。
しかし、そのような異能を扱える者は次第に増えていった。
異能を扱える者は総じて身体能力が飛躍的に向上し、やがては異能を発現していないものを迫害し始めた。
初めは一部だったそれが、着実に広がっていき、異能者が政権を掌握したことによって急速に浸透した。

ここが日本だと誰が信じるだろうか？
首都、東京は異能者同士の争いにより廃都と化し、今では無能者が細々と怯えながら暮らすスラムに成り果てた。
異能者も、力の強さによって明確に階級が分けられている。
外交においても、日本はその力を誇示し、逆らう国には武力行使も行っている。
それもすべては、現・日本のトップによる仕業だ。
独裁国家。
日本はかつてのドイツよりもなお酷い。
そのトップとは異能者達が神と崇める存在である。
その顔を見た者はただの一人もいない。
どんな強力な異能者も彼に逆らうことはできない。
なぜなら、異能者達は彼に一度殺されているのだから。

異能が発現した者は皆、口を揃えて言う。

『不死鳥に食い殺される夢を見た』

そして、彼はその不死鳥とまったく同質の雰囲気を纏っており、姿を眼にするたけで震えが止まらなくなる。

魂に刻まれた恐怖。

―死能（デス・アビリティー）

死んで始めて得られる力。

自分達は生まれ変わり―新生した特別な人間だ。

そんな幻想を抱いているのだ人間は。

一度、滅びるべきだろう……。

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしております！！

レジスタンス

今日の仕事を終え、柳に業務連絡を終えた俺は帰路についた。
夜だというのに、周囲は光と喧噪にまみれている。
死能により、技術は衰退したが、その代わりに、街はお伽噺が溢れ出したようだ。
五年前。
誰が予想できただろうか？
空を飛ぶ人間がいることを。
生身の肉体で浮游する者もいれば、龍の姿になったり、背中から翼を生やした変身能力者（トランスフォーマー）なんでのもいるくらいだ。
ちなみに、変身能力者は、人間の姿を逸脱すればする程、死能としての階級は高い。
中でも、龍のように想像上の生物は最上位である。
五年前はどうか知らないが、今では相当いい暮らしをしていることだろう。

そんな事を考えている間に、家の玄関がもう目の前にあった。
中世ヨーロッパの貴族の家をイメージして建てられた建築家のセンスが光る家だ。
首都大阪の上級区であるこの辺では比較的こぢんまりとした感じはするが、そこも含めて俺は気に入っている。
玄関のドアノブに手をかけ開く。

「ただいま」
「おかえりなさいませ、マイマスター」

その瞬間、居心地のよい温かい雰囲気と共に、俺に仕えていてくれ

るメイドのセラスの柔らかい声が俺の耳朶を打つ。
帰ってきたという実感を抱きつつ、俺はセラスの微笑んだ。

「セラス、俺がいない間に変わったことはなかったか？」
「はい、マイマスター。特になにも。族が数名進入したくらいです」
「おいおい、それは十分変わったことだろ？……で、その族とやらは？」
「修弥様が始末しました」
「そうか」

修弥とは、隠れて俺の護衛をしている奈津の双子の兄である。
如月修弥と如月奈津。
修弥はこの家の警護。
奈津は俺の護衛。
双子だけあって、顔はそっくりで、修弥は少女と見まごう可憐な容姿をしている。

「それにしても族…か」

恨まれてるのは当然である。

昼はあんな仕事をしているから祝福を受けていない人間からは憎悪の対象だ。
それに、それだけでなく―

「我々はレジスタンスですから、死能使いにも相当恨まれています。今回も過去に我々に関係のあった人物による仕業によるものです」

セラスは淡々と感情の読めない声で続ける。

「まぁ、政府側に報告されなかったのは証拠がなかったからでしょう。その証拠を掴むためにこの家に侵入したとみた間違いありません」
「そうか…だがこれはミスだな。これからは生き残らせないように徹底していかないと…」
「はい、マイマスター」

そう。
俺達はレジスタンスである。
目的は死能使いが崇拝している不死鳥の神を殺すこと。
俺もセラスも修弥も奈津も、そしてこの家にいるレジスタンスメンバーは皆、死能使いでありながら、死能使いを憎悪している集団だ。

そのためには、これ以上のミスは許されない。

今は権力が必要だ。
少なくとも、特区に入れるようになるくらいは……。

死能使いはその能力による階級が分けられている。
そして階級によって、住む場所も変わる。

―祝福を受けていない人間は、東京―最下層下級区。

―死能は扱えても、力が小さく物理的な破壊力を持たない者は下級区。

―かろうじて物理的破壊力を持ち、軍の下っ端達は中級区。

―大きな破壊力を持ち、軍や警察の上層部に所属している者は上級区。

―軍や警察の幹部、政財界に所属している者は特区。

特に特区は特別で、特区の住民になれると、あらゆる特権が行使できるようになる。
たとえば、今日の柳のお遊びも、特区の住民だからこそできたことである。
そして、何より、特区の住民はその権利を貰う時に不死鳥の神に謁見することができる。
俺の狙いはそこにあった。

今の俺の階級は特区の柳の直属の部下ということで上級区。
俺は上にあがるには、まずは柳を始末する必要があった。
少なくとも、このままでは柳い飼い殺しにされることは明白である。

ならば―

「そろそろ…動くか」

さぁ、待っていろ不死鳥。
お前に目に物みせてやる。

レジスタンス（後書き）

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしております！！

吸血鬼の晩餐

ガシャリ…ガシャリ…。

夜の闇に鈍い金属音が混じっている。
静寂の中、生まれたこの場にそぐわない音は、聞く物を恐れさせずにはいられない。

ガシャリ…ガシャリ…。

身体能力の向上に併せて、人間に夜目が効く者達が増えて早数年。
しかし、街頭というものは街にまだ残っていた。夜目が利くようになったとしても、人は無意識に闇を恐れているのだろう…。

その街頭の光が一人の少女を浮かび上がらせる。
風に舞う金髪は美しく、まるでそれ自体が光を発しているようだ。
碧眼は金髪に絶妙のバランスで調和され、肌は白磁のように白い。
人形のような見た目１４、５歳程の少女。お伽噺の中の姫が飛び出してきたようだ。もしかしたら、実際、彼女は姫なのかもしれない。
何故なら、この現代にはお伽噺が溢れているのだから。

ガシャリ…ガシャリ…。

―だからこそ、それは異質だった。

少女の触れれば折れてしまいそうな細い手足に着けられた枷と首輪。
手足は必要最低限動けるだけの長さの鎖が付いた手錠、足枷。
首輪は今にも少女の首を食いちぎらんとする程に締め付けられている。

なまじ見目麗しい容姿をしているだけに、その姿はあまりにも痛々しい。
まさに彼女は拘束されていた。

しかし―

しかし、少女は笑顔だった。
見る者を惚けさせるような満面の笑みは拘束されていることと相まって倒錯的な美しさすら感じさせる。
そう言葉を並べ立てて何が言いたいかというと―少女は美しい。これにつきる。

「あっ」

鎖を引きづりながら、とぼとぼと歩いていた少女は、前方にあるものを発見して、笑みを深くした。

「見〜つけた♪」

口唇をペロリと舐めながら、少女は今日の晩ご飯の味を想像した。

玲二は鎖を引きずる少女を見た瞬間、臨戦態勢を取った。
それは少女があまりに異様な出で立ちをしていたからではない。玲二は特区に住める程の死能使いだ。異様な出で立ち、精神破綻者と修羅場をくぐる抜けた経験は幾度もあった。たとえ、最近は『遊び』

にかまけて実践を経験していないとはいえ、そこらの連中に遅れを取るはずもない。

しかし玲二は嗅ぎ取っていた。
戦場を経験した嗅覚。
それはまさしく、眼前の少女を強敵として認識している。

「はぁー！」

玲二は体勢を低くし、腰を落とす。
すると、玲二の周囲はバリバリと音をたてて帯電を始めた。これこそが玲二の死能である。『雷光一閃』の柳玲二。孤児として幼少を育った男は、今やその道では知らぬ者なしのビックネームとなっていた。

「久しぶりの殺し合いだ。加減はできんが、よもや怯えてはおらんだろうな？」
「まさか」

玲二の挑発に答えたのは、やはり満面の笑みの少女。死能を見せた玲二に対しても、何ら恐れも怯えも見せない。

それどころか―

「おじさんこそ簡単に死んじゃわないでよね！」

強烈な殺気を放ちながら、挑発をしかえした。

「よく言った」

瞬間。
玲二の姿は消えていた。
そして、訳も分からぬまま、少女は銃弾のように吹き飛ばされ、いくつもの街頭を粉砕していく。
そこに至って、ようやく玲二の姿を視認できるようになる。
その身体に着ていた服は焼け焦げ、白い煙を放っている。それは超高速で移動したことによって引き起こされていた。
蹴る足と殴る拳に雷撃を一点集中させた一撃必殺を目的とする技。
玲二の二つ名にもなっている雷光一閃その技である。

「死んだか…」

数十メートル先には動かなくなった少女。
未だ、この拳を受けて立ち上がった者はいない。
まして、相手は少女だ。その体内は衝撃と雷撃でグチャグチャになっているはずである。

立ち上がれるはずがない。そう判断をくだして、玲二を少女から視線をはずす。

「ははっ！」

玲二は戦闘の高揚に酔ったように笑いを零す。

「当然の結果だ」

なにより―

―この俺が負けるはずがない。

死能使いとして突出した能力を持って生まれてきた人間特有のプライド。それは驕りとなって玲二の心の奥底に凝り固まっていた。
それは油断。
それ故、強者として認識した相手の生死を確かめなかった。

玲二が少女から視線をはずし、振り向いたその時―玲二の首筋にぞっとするような怖気が走った。
その怖気の正体を確かめぬまま、玲二は反射的の首を大きく逸らす。
その首を薄皮一枚の所で裂いていく研ぎ澄まされた凶器。
続く第二連撃目。体勢の崩れた玲二は雷を使って回避しようと試みるが、油断で混乱した頭より、二撃目のほうが、ほんの刹那の差で早かった。
狙われたのは足首。
その凶器は玲二の足首を容易く裂いていく。

「ぐあっ！！」

玲二は苦悶の声を上げながら相手から距離を取る。
裂かれて、鮮血を撒き散らす足を庇うようにしながらその相手―殺したはずの少女を睨み付ける。
少女は変わらぬ満面の笑みでその視線を受け入れる。
変わったことといえば、口唇の端から血を流していることと、拳を受けたであろう腹部の服が焦げ、拳の形に捻れていることだろう。

「おじさんやるじゃん！私殺すつもりだったんだけどなー」

少女は何事もなかったかのように蹲る玲二を見下ろす。その様子からは、とても必死の一撃を受けたようには見えない。

「貴様…何者だ？」

「私？…私はただの―」

玲二の視線を楽しむかのように少女はそれを口にする。

「―しがない吸血鬼だよ」

吸血鬼。

それは幻想種の一種である。

物語の中の住民。龍、ペガサス、悪魔、天使に代表される強力な力を持つ存在。

吸血鬼はそれらの中では一歩劣るものの、それでも非常に強力な幻想種である。

だが―

「…馬鹿な。幻想種だと…？」

幻想種は死能使いの中でも非常に稀少だ。日本には万を超える死能使いがいるが、幻想種はその内の１００にも満たない。

なにより―

あの少女の格好からすればありえない。
幻想種となれば、それだけで高い位につける。しかし、少女はまるで囚人のようなのだ。玲二が信じれないのも無理はなかった。

「じゃあ続きやろっか」
「っ！！」

しかし、玲二のそんな戸惑いも少女が何気なく言った言葉によって吹き飛ばされた。そして、改めて認識した。
自分が今、とんでもない危機にいることを。
目の前で笑っているのは幻想種。
幻想種にはそれぞれ特性があり、吸血鬼の特性は―

「―不死性…」

死なない。
身体を解体しようと、燃やそうと、灰にしようと、潰そうと、沈めようとも死なないのだと言われている。そして、その通り、少女は玲二の渾身の一撃を受けても何事もなかったかのように立ち上がって見せた。
玲二は生まれて初めて、怯えていた。

「ははははっ」

その笑いは高揚ではなく絶望。
人は未知の存在に対して無意識に恐怖を抱く。それは本能的なものであり、よっぽどのことがないと拭いさることはできない。
だが―

「はぁーっ！」

玲二はその絶望と恐怖を意志でねじ伏せる。
ここで戦わずしていつ戦う！？
玲二は戦意を奮い起こしながらも、今にも自分を殺そうとしている少女の美しさに、見惚れていた。絶対的な強さと美しさ、それは玲二が最も渇望してきたもの。
今日殺したあの者達も素晴らしかった。
父は助からぬと悟りながらも、家族のために頭を地面の擦りつけ、妻と娘はそんな父を愛し、信じていた。それは殺されてからも変わらないだろう。
美しい。美しかった。

そして―

そんな美しく、尊いものを壊すことこそが玲二にとって至高の快楽だ。
故に、破壊しよう。蹂躙しよう。唾棄しよう。穢そう。―魂まで。
今ここに邪悪なる覚悟は完成した。

少女は歓喜していた。
理由は至極簡単である。
今まで右往左往していた敵が覚悟を決めたのだ。これ程嬉しいことはない。
少女は自分の腹をさする。
素敵な一撃だった。
恐らく、自分以外なら断末魔の声すら上げることなく絶命していただろう一撃。
しかし、足りない。あれでは足りないのだ。
―あれでは、まだ自分を殺してはもらえない。
玲二が全身を帯電させ、輪郭があやふやになっていく。
少女はそれを受け入れるように手を広げ―

「――っ！！」

雷撃のようにジギザグの軌道を描きながら、玲二が迫る。
少女が手を広げたことに、一瞬だけ気を取られたようだが、それを無視して疾駆する。
速さは先ほどよりは遅い。
だが、込められた力は段違いであった。そして、今まさに溜めている最中。
まるで、玲二自身が雷そのものになっている錯覚さえ覚える。

「いいよー！」

少女の瞳に狂気が宿る。

「雷光―」

溜めを十分に終えると、玲二の速度は飛躍的に上昇した。
残像を残しながら、少女を殺そうと全身をバネにして伸び上がる。
決して大振りではなく、しかし、勢いは殺さないように。
何万回と繰り返され、洗練されたそれは一種の芸術である。

「―双閃っ！！」

引き絞られた拳が少女の美しい顔に突き刺さり、蹂躙する。

「うがっっ！？」

さらに、それだけに留まらず、空いた片方の拳で顎のアッパーカットを放つ。

が―

その二撃目は阻まれていた。
少女の手を拘束していた鎖によって。
どんな素材でできているのか、それは玲二の拳を確かに阻んでいたのだ。

「はあああああっっ！」

玲二がさらに力を込めると、さすがに鎖は脆くも崩れ去っていく。
そして、鎖が完全に破壊された瞬間―
底知れぬ狂気と殺意が玲二を襲った。

「なっ！」

拳は鎖を突き破り、少女の顎に突き刺さっている。

だが、少女は未だに笑みを崩さないどころか、さらに深くする。その瞳は深い陶酔に酔いしれていた。

「楽しかったよ、おじさん。さすがは特区。私が殺すに値する」

少女の細い両手は玲二の拳を握り、引き裂いた。
玩具の腕にように容易に行われたそれは、まさい狂気の所業。
手の封印拘束を解かれ、力の増した少女には簡単なことだった。

「あああああああっ！」

吹き上げる鮮血。
少女はのたうち回る玲二を組み伏せると、その首筋に人間にはない発達した刃を突き立てた。

ゴクゴク。

少女は怪力で締め上げながら、喉を鳴らして、玲二の血液を飲み干していく。
すると、美しい顔を歪めていた傷が見る見るうちに再生していく。
一分もすれば、そこには何ら変わりのない傷一つ無い相貌があった。
その間も、少女は恍惚とした表情で血液を飲む。

そして、十分もした頃だろうか？
少女はおもむろに立ち上がり、血に濡れた口元をペロリと舐めると―

「ごちそうさま♪」

最早、ミイラと化した玲二に向かって、礼儀よく手を合わせるのだった……。

吸血鬼の晩餐（後書き）

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8609h/

黒き王と血と涙

2010年10月9日04時11分発行